

引用文献

佐藤愛彦・俵 純治・染谷臣道. 2002. 『NHK スペシャル アジア古都物語 ジョグジャカルタ 支え合う王と民』日本放送出版協会.
平尾和洋・高尾克樹・瀬戸口健・長谷川豪. 2003. 「インドネシア・ジョグジャカルタ市のロモ・マゴン・カンボンの居住環境改善経過に関する

考察」『日本建築学会計画系論文集』574: 105-112.

Setiawan, B. 2010. Kampung Kota dan Kota Kampung: Potret Tujuh Kampung di Kota Jogja. Pusat Studi Lingkungan Hidup Universitas Gadjah Mada.

ジャカルタパンクと政治

金 悠 進*

ああ マルシナ あなたは取り残された
ああ マルシナ あなたの死は無駄にはな
らない

(MARJINAL／「マルシナ」*Marsinah*)

2014年9月、インドネシアの首都ジャカルタで、モヒカン頭に全身タトゥーをしたパンクロックバンド、マージナル(MARJINAL)が「マルシナ」の歌を歌っていた。私はその路上ライブを静かに目に焼き付けながら、彼らの歌から込み上げる怒りと、そこに秘められた切なさのようなものを感じた。

労働運動が厳しく制限されていたスハルト権威主義体制期の1993年、女性労働者マルシナ(Marsinah)は労働運動を率いたことから、24歳の若さで軍に虐殺された(「マル

シナ事件」)。マージナルは彼女の死を無駄にしないために、バンド名をMARJINAL(インドネシア語読みで「マルジナル」)にした。ボーカルのマイク(35)は、1996年、21歳のとき、ジャカルタ芸術大学(IKJ)在籍時に「打倒スハルト」の学生運動に参加した。マイクはデモの途中、ベース・ウクレレ・コーラスを担当する相方のボブに出会った。ふたりは「デモだけでは何も変わらない」、「この運動をさまざまな表現でサポートしなければならぬ」と考えた。しかし、言論と表現の自由が抑圧された中でスハルト独裁体制に抵抗するためには、何か工夫を凝らす必要があった。マイクとボブのふたりは仲間とともに、タトゥー、版画アート、そしてパンクを始めた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 マイク

ギターには2004年に暗殺された人権活動家ムニールのステッカーが貼られている。

パンクスになったマージナルは、ベースキャンプであり生活共同体でもある「タリンバビ (Taring Babi)」を運営し始めた。私はアポなしでここを訪問したが、マージナルのギタリストとそのスタッフが快く受け入れてくれた。普段はオープンスペースとして、パンクスや近所のストリートチルドレンを受け入れ、共同生活をしているという。1997年アジア通貨危機に端を発するスハルト体制崩壊によって、インドネシアの政治は混乱し、失業率は上昇、ジャカルタの街にはストリートチルドレンが溢れた。路上で物売りをする子どもたちが「プレマン (日本でいう「ヤクザ」)」に勧誘されることに危機感を覚えたマージナルは、積極的に街へ出て、ストリートチルドレンを見つけてはタリンバビに受け入れた。タリンバビの中には辞書や本が積み重ねられ、教育費が高くて払えず、学校に通

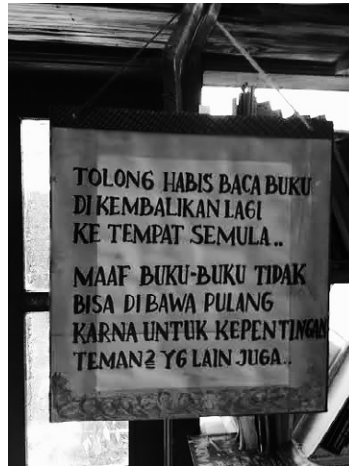


写真2 タリンバビの本棚

「本を読みなさい。本は持って帰らないで。」

うことができないストリートチルドレンに読書の大切さを伝えている。「政府に頼ることなく、自分たちが生きる術を自分たちで習得しなければならない。」マイクは力強く言う。マージナル・タリンバビはそのための材料を「シェア」する。彼らは決して「与える」とは言わない。彼らも子どもたちから学んでいるのだと言う。

近年ジャカルタには、「プガメン (路上ミュージシャン)」の中にウクレレを演奏する10歳前後の子どもたちがいる。その中には、マージナルから直接ウクレレの弾き方を伝授してもらった子どももいる。マージナルは路上サバイバル術のひとつとして、ギターより安く、小さい手の子どもでも弾きやすいウクレレを子どもたちにすすめた。

マージナルの思想の根幹には、このような10歳前後の子どもたちが教育を受けられないのは「人権侵害」であるとの考えがある。彼らはそのような人権侵害の解決に及び腰の



写真3 タリンバビの内壁の版画

中には「タトゥーは犯罪じゃない (TATOO BUKAN KRIMINAL)」という版画も。

権力者を20年近く批判してきた。彼らがタトゥーをするのも、1980年代前半にタトゥーをしたゴロツキが国家主導で虐殺された「ミステリアスな射殺 (Petrus)」事件に対する抵抗である。タリンバビの内壁には一面に版画が貼られていた。スハルトや国軍の人権侵害を批判する痛烈なメッセージが込められたものが大半である。

帰り際、入り口に掲載された予定表を見つけた。そこには「日曜日 (カーフリーデー)、朝6時、ホテルインドネシア前、ライブ」と書かれていた。私はメンバーに「必ず見に行く」と伝え、タリンバビを去った。

日曜日当日、カーフリーデーでジャカルタの目抜き通りとして知られるスデイルマン通りは、朝6時から多くの人でにぎわっていた。ホテルインドネシア前に行くと、ライブステージの隣で、版画ワークショップが行なわれていた。マージナルはこの日のトリをつとめるという。出番まで観客に版画を教えていた。10時、やっとマージナルの出番

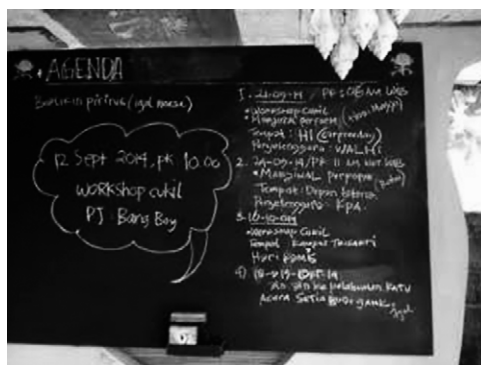


写真4 タリンバビにあるマージナルの予定表

「日時：2014年9月21日日曜日朝6時／小ワークショップ、マージナルパフォーマンス／場所：ホテルインドネシア前 (カーフリーデー) /主催：WALHI (環境保護団体)」



写真5 路上版画ワークショップ

だ。ライブ開始予定時刻の6時からすでに4時間が過ぎていた。マージナルを何年も追い続け、ドキュメンタリー映画「マージナル＝ジャカルタパンク」を日本で上映した中西あゆみ監督によると、「それでも (開始4時間遅れでも) 見られたのは奇跡ですよ。ライブをしないなんてことは日常茶飯事」とのこと。ステージ前には老若男女、多宗教多民族、富裕層貧困層、多種多様な人が集まっていた。その日のライブステージでは最多の観



写真6 路上ライブ

客数である。お世辞にも上手とはいえない演奏技術である。しかし、そこからはすさまじいエネルギーを確かに感じとることができ、胸が熱くなった。

女性労働者が汗を流して働く姿が見える
彼女の汗のしずくがこの地を輝かせている
でもあなたが費やした強大なエネルギーは
そんなに大きくは感じられていない
傲慢さに押し流され あなたは忘れられて
いる



写真7 マージナルのメンバーと筆者

ああ マルシナ あなたは取り残された
ああ マルシナ あなたの死は無駄にはな
らない

「マルシナ事件」から 20 年以上が過ぎた。
しかし、その真相は闇に葬られている。パン
クの激しいリズムに乗って流れる「マルシ
ナ」の歌は、1990 年代のインドネシアにお
ける反スハルト運動時の労働者、人々の怒り
を、いまでも代弁している。